

# 米国19世紀末の幼稚園におけるリズム活動の指導内容に関する一考察 ～米国19世紀末に出版されたリズム活動用の器楽曲集の分析を通して～

A Study of Kindergarten Rhythmic activities in United States in the Late 19th Century  
～Through an Analysis of the Piano Music for Rhythmic activities in United States in the Late 19th Century～

持田 葉子\*

## 要 約

本稿では、19世紀末の米国幼稚園における身体によるリズム活動の指導内容について明らかにする一環として、当時の米国で出版されたリズム活動用の器楽（ピアノ）曲集である、アンダーソン（Anderson, Clara L.）による『器楽による典型リズム集』（*Instrumental Characteristic Rhythms* : 1896）と『器楽による典型リズム集第2編』（*Instrumental Characteristic Rhythms Part II* : 1900）を取り上げ、その内容を分析した。本書には、「行進」「スキップ」などに用いる曲、「描写的なリズム」として身のまわりの事象などを模倣表現するための曲が掲載されている。それらの曲の特徴とアンダーソンの解説から、子どもが音楽を聴いて動くことによって、音楽を解釈する力を養おうとしていたこと、また「描写的なリズム」における模倣表現においては、それぞれの題材が音楽によって上手く描写されており、それによって子どもの表現を引き出そうとしていることがわかった。本書には、子どもの身体に内在しているリズムと自由な表現を引き出すという発想が見られ、その指導内容には、進歩主義教育の理念が反映されていることがうかがえた。

キーワード：リズム活動、指導内容、幼稚園、アメリカ19世紀末

## I. はじめに

筆者は、明治・大正期におけるキリスト教主義幼稚園の音楽活動を明らかにする一環として、キリスト教主義幼稚園である広島女学校附属幼稚園の大正初期における音楽活動について、本園で1915（大正4）年に編纂された幼児曲集『遊戯唱歌』をもとに考察をした<sup>1)</sup>。その結果本園では、器楽（ピアノ）曲と共にスキップやジャンプ等を行うリズムカルな活動が行われ、また子どもの伸び伸びとした動きや表現の自由性が尊重されるなど、それまでの日本には薄かった「リズム」と「子ども本位な表現」という視点があることを明らかにした。またこのような新しい視点を持った音楽活動は、米国で進歩主義教

育を学んできた宣教師たちによって実践され、またその音楽活動は、『律動遊戯』を考案した土川五郎（1871～1947）にも少なからず影響を与えていた<sup>2)</sup>。

土川五郎は、明治期に始まった唱歌遊戯について、動作が小さく委縮して活動量が不足している、運動感覚が欠如し表情が主知的に傾いている、等の問題点をあげ、基本筋肉を使って十分に大なる運動をすること、運動感覚から情緒を惹起することを提唱し<sup>3)</sup>、また「リズムは幼児の筋肉を振動する力を持っている、しかも愉快的感情を興うるものである。」と述べ<sup>4)</sup>、当時の米国におけるリズム活動を参考にしながら<sup>5)</sup>、独自の方法を開拓し、それまで日本にはなかった新しい息吹を吹き込んだ。

こうした大正期において、土川やキリスト教主義

\* Yoko MOCHIDA 聖和短期大学 准教授

- 1) 持田葉子（2015）「広島女学校附属幼稚園における音楽活動について～広島女学校附属幼稚園・保姆師範科編纂『遊戯唱歌』の考察を通して～」聖和短期大学紀要第1号 pp.39-47
- 2) 「律動遊戯の過去及将来」（1918）『婦人と子ども』11巻4号 p.136  
土川はここで、『廣島の遊戯は中々参考になる。其曲の選び方は幼児に適している』とし、土川の「律動遊戯」にプランコを引用したことを述べている。
- 3) 土川五郎（1917）「幼稚園の遊戯に就て」『婦人と子ども』17巻9号 pp.330-336
- 4) 土川五郎（1918）「リズムについて」『婦人と子ども』18巻2号 p.46
- 5) 「律動遊戯の過去及将来」（1918）『婦人と子ども』18巻4号 pp.134-138  
土川はここで、米国のカーチスの『遊戯を通じての教育』やホッファーのフォークダンスの書等を参照したことを述べている。

幼稚園によってもたらされた「リズム」に視点をおいた身体活動は、19世紀末から台頭してきた米国の進歩主義教育下における音楽活動の影響を受けており、当時の米国の身体によるリズム活動の指導内容を知ることは、日本の保育における音楽活動の変遷を捉える上で意義のあることと思われる。

そこで本稿では、19世紀末に米国にて出版された初期のリズム活動用の器楽（ピアノ）曲集を分析することを通して、その内容を明らかにし、当時の米国の幼稚園におけるリズム活動の指導内容を捉える一助としたい。

## Ⅱ. 米国の19世紀末から20世紀初頭に出版された主な幼稚園用器楽曲集

この時期の米国の幼稚園向けの音楽教材について、バンデウォーカー（Vandewalker, Nina C.）は、米国における歌の本の出版は、1880年代から始まり、歌の出版の充実後に、マーチ等のための器楽曲集が出版されたと述べている。またこうした器楽曲は、子どもたちに音楽的解釈の刺激を与え、幼稚園の音楽レパートリーに豊かさを与えたと述べ、次の2点の器楽曲集を紹介している<sup>6)</sup>。

- ・アンダーソン（Anderson, Clara L.）：『器楽による典型リズム集』（*Instrumental Characteristic Rhythms*）（1896）
- ・ホフファー（Hofer, Mari R.）：『子どもの世界のための音楽』（*Music for the Child World, Vol. I. II. III*）（Vol. I 1900, Vol. II 1902, Vol. III 1911.）

前者は、クック群師範学校（The Cook County Normal school<sup>7)</sup>の幼稚園でピアノ奏者として子どもたちのリズム活動を援助したアンダーソンによって作曲された作品集で、クック群師範学校校長であったパーカー（Parker, Francis W.）に献呈されている。なお本書の続編が、後にパートⅡ（1900）とパートⅢ（1905）として出版されている。

また後者は、ホフファー（Hofer, Mari R.）<sup>8)</sup> 編纂

の幼稚園のための器楽（ピアノ）曲集である。この器楽曲集については、土川五郎も著作の中で推薦している<sup>9)</sup>。

さらに、ビービ（Beebe, Katherine）は、幼稚園での器楽教材として、上記の2つの他に、モンツ（Montz, Katharine）の『幼稚園教師のための器楽小品集』（*Instrumental Sketches for Kindergarten*）（1894）をあげている<sup>10)</sup>。この曲集は、ルイヴィル（Louisville）の幼稚園における実践から生まれたもので、雑誌 *The Kindergarten News*（1894）において本書の序文が紹介されている<sup>11)</sup>。

19世紀末に出版が始まったと言われる幼稚園用器楽曲集の初期の主要なものは、以上あげた通りであるが、とりわけ興味深いのは、アンダーソンの器楽曲集である。この器楽曲集が出版された当時のクック群師範学校は、デューイによって新教育の父と言われたパーカーが在籍し、形式的なフレーベル主義からの脱却を図り、児童心理学や生理学の新しい見地を取り入れた教育に取り組み始めた時期である。そのような中で出版された本曲集からは、新教育の理念に基づいたリズム活動の特色が見えてくる可能性がある。

そこで本稿では、アンダーソンの『器楽による典型リズム集』（1896）と『器楽による典型リズム集：第2編』（1900）を取り上げ、その内容を考察していきたい。

## Ⅲ. アンダーソン『器楽による典型リズム集』（1896）<sup>12)</sup> 及び『器楽による典型リズム集：第2編』（1900）<sup>13)</sup> の考察

この2冊の書（ここでは、『器楽による典型リズム集』を第1編、『器楽による典型リズム集：第2編』を第2編と表記する）は、先に述べた通り、クック群師範学校（The Cook County Normal school）の幼稚園でピアノ奏者として子どもたちのリズム活動を援助したアンダーソンによって作曲された作品

6) Vandewalker, Nina C. (1908) *The Kindergarten in American Education*, The Macmillan Co., pp. 175-176  
ニーナ・C・バンデウォーカー著 中谷彪訳 (1987) アメリカ幼稚園発達史教育開発研究所 pp. 155-156

7) 1896年からは、シカゴ師範学校（The Chicago Normal school）に改名

8) Mari R. Hofer (1858-1929) ホフファーは、シカゴ大学で音楽を勉強し、幼稚園向けの音楽教材集を数多く出版、また幼稚園教師向けのセミナーを行うなど、当時活躍した人物である。

9) 土川五郎 (1918) 「律動遊戯の過去及将来」『婦人と子ども』18巻4号 p. 138

10) Beebe, Katherine (1904) *Kindergarten Activities*, The Saalfield Publishing Co., pp. 31-32

11) Montz, Katharine (1894) "INSTRUMENTAL SKETCHES FOR KINDERGARTENERS" *Kindergarten News No. 8 Vol. 4*, p. 268, Milton Bradley Co.,

12) Anderson, Clara L. (1896) *Instrumental Characteristic Rhythms*, C. L. Anderson Publishing Co.

13) Anderson, Clara L. (1900) *Instrumental Characteristic Rhythms Part II*, C. L. Anderson Publishing Co.

集で、第1編は、パーカーに献呈されている。また第1編の序文は同園の教師で、クック群師範学校でも教鞭をとっていたアレン (Allen, Annie E.) によって書かれ、また第2編の序文は、アンダーソン本人によって書かれている。第1編の序文には、この曲集は、同園での5年間の取り組みの所産であると記されている。アンダーソンの取り組みについては、第1編の出版の後、*The Kindergarten Magazine* (1897)<sup>14)</sup>において取り上げられている。その記事によると、アンダーソンは、6年間アシスタントとしてピアノを担当し、リズム活動に共感的に参加した。彼女は、最初に幼稚園に来た時、子どものために作曲をする意図はなかったが、もともと優れた音楽教育を受けていたため、次第にそれに駆り立てられていった、とのことである。

それぞれの曲集に掲載されている曲は、表1と表2の通りである。また曲を活動別に分類すると表3のようになる。第1編の曲は、全部で20曲あり、「行進」「スキップ」「描写的なリズム」の3種類から成る。また、第2編では、第1編の補足の形で「行進」と「スキップ」の8曲が追加されており、「描写的なリズム」は掲載されていない。どちらの曲集もすべてアンダーソンによって作曲されたもので、曲の冒頭に詳細な演奏のためのアドバイスを書かれていることが多く、演奏の技術を要する曲が多い。

### (1) 「行進」「スキップ」について

「行進」は第1編と第2編を合わせると9曲となる。どの曲も、4/4であれば左手の1拍目と3拍目は4分音符で単音のベース音、2拍目と4拍目は同じく4分音符で和音を弾くという形になっている。弾き方においても、1拍目と3拍目にアクセントをつけ、拍子を明確にし、速さを一定にするよう指示が出されており、子どもたちが拍を感じながら歩けるよう配慮がされている。

「スキップ」においては、右足と左足を一歩ずつ交互に行う単純なものだけでなく、Run, Run, Run hop (2歩走り3歩目でスキップ) など、幾つかのステップを組み合わせたものなどがある。曲は、そのステップのリズムに合わせて作られており、それによって、動きとリズムの合致を生み出している。

このような「行進」や「スキップ」をどのように行っていたのか、第2編の序文にアンダーソンによる説明がある<sup>15)</sup>。それによると、「リズム活動は、朝の最初の30分から1時間行われていた。子どもたちは円型に並べられている椅子に座る。どの椅子を選んでもよい。1年の最初の時期は、次のようなスキップをする。4～5人の子どもたちが、円の中央に行き、ピアノがゆっくりしたステップのリズムを奏でたら、円の中央にいる子どもたちが、それぞれ座っている子どもたちの中からパートナーを選んで、スキップを一緒にする。そして、音楽がゆっくりになると、選んだパートナーを席に戻し、軽くお辞儀をする。最後には全員がスキップする。また、スキップをしている時、教師は音楽を突然マーチに変えたりして、子どもの音楽を解釈する力を呼び覚ます努力をする。多くの子どもたちが、スキップと行進の違いに慣れた後、新しいスキップの形—例えば「run, run, run hop」が加わる。その場合、子どもたちの方からより難しいものを要求するように、ゆっくりと自然に順をおっていく。このようにして、それぞれの新しい動きを、子どもたちが希望することにより、活動は広がっていく。」

こうした記述から、リズム活動では、新しい動きと曲を少しずつ取り入れていくことによって、様々な動き経験し、それによって音楽を解釈する力をつけようとしていたことが伺える。

### (2) 「描写的なリズム」について

「描写的なリズム」に出てくる題材は、「雨粒」「北風」「自然(植物)の目覚めと眠り」「鳥」「馬・トナカイが走る」などのような自然現象、また「刈り入れ」「車輪」等の社会生活がある。

これら「描写的なリズム」の曲の特徴としては、題材の感じが、音楽によってよく表されていることがあげられる。例えば、「北風」では、2小節をひとまとまりとして、その中で強弱の波があり、それによって風の感じがよく表現されている。また曲の最初はピアノシモ(ごく弱く)で始まり、途中フォルテシモ(大変強く)までだんだんと大きくなり、最後はまた弱くなって終わるというように構成され、風がだんだん強くなってそして静まってい

14) M.S.T. (1897) "The Place of Rhythm in Child Life" *The Kindergarten Magazine Vol. 10 No. 4*, Kindergarten Literature Company, pp. 245-251

15) Anderson, Clara L. (1900) "Preface" *Instrumental Characteristic Rhythms Part II*, C. L. Anderson Publishing Co., p. 5

表1 「器楽による典型リズム集」の内容

	題名	調性	拍子	アンダーソンによる各曲に記載の解説
1	陽光	変ホ長調	6/8	光、幸福を思い浮かばせる、軽く少し早めに演奏する、子どもたちへ伝える効果は、明るさや幸福な雰囲気、手押し車や北風の音楽とはとても対照的。身体のまわりで腕を揺らす動きは、メロディと結びついている。
2	スキップ	変ロ長調	4/4	最初の4小節はパートナーを選ぶ。子どもたちが一人で行いたい場合は省略する。
3	行進	ヘ長調	2/4	マーチを弾く時は、速さを一定にリズムカルに弾く、また4/4では1拍目と3拍目に、2/4では1拍目にアクセントをつける。4/4では4分音符ごとに一歩ずつ、2/4では8分音符ごとに一歩ずつ歩く。
4	円を作る	ト長調	4/4	この4小節の曲は、子どもたちが円を作る時に役立つ。4分音符ごとに一歩進む。
5	行進	ト長調	4/4	記載なし
6	手押し車の車輪	ト短調	4/4	秋のゲームに必要。陰気なメロディが車輪の回転を連想させる。各小節の1拍目と3拍目に強いアクセントをつける。
7	スキップ	ヘ長調	4/4	最初の4小節は、導入として少しゆっくり弾かれ、その間子どもたちはパートナーを選び、3小節目の長く伸ばす所でおじぎをする。そしてスキップの準備に入る。スキップは平易なスキップである。最後の8小節は、パートナーを元の場所に連れて行き、小さなおじぎをして自分の場所に戻る。
8	刈り入れ	変ロ長調	6/8	カマを振り下ろす所、すなわち各小節の1拍目にアクセントをおく。
9	歩く馬	変ロ長調	2/4	馬が歩く動きを音で表す。体のバランスをとること、筋肉の発達を助ける。ひざはおしりの位置まで高くあげる。
10	行進	ハ長調	4/4	記載なし
11	北風の音	変ホ長調	2/4	このメロディは風の音の表現で、風の動作が出てくるゲームで使うことができる。例えば、煙や葉が揺れる、麦の穂が曲がる、小さな花や草が揺れるなど。始まりはとてもやわらかく弾かれるべき。少しずつ大きくなり、その後だんだん小さくなる。
12	馬、トナカイが走る	ヘ長調	4/4	子どもが走るリズムを感じられるように、左手のベースをはっきりと同じ速さで弾く。また小さなアクセントを拍の頭につけるとリズムがはっきりする。
13	行進	ヘ長調	2/4	記載なし
14	スキップ	ヘ長調	4/4	記載なし
15	行進	ト長調	4/4	記載なし
16	雨粒	イ長調	4/4	この作品の演奏のためには、タッチの精密さと繊細さが必要である。子どもたちが雨粒の表現をするために、その小さな足は、音楽の主題のパターンによって導かれなければならない。そのために、軽く手首を効かせたスタッカートを用いる。音色の色彩、明暗、強弱が子どもに雨の勢いを示す。これにより、音色の質を子どもたちが素早く知覚することを促す。
17	飛ぶ鳥	変ホ長調	6/8	始まりから6小節目までのメロディは、鳥の飛行を表し、7小節目のピッチカートの音は強く弾かれ、鳥が弾んで歩いていることを表す。この7小節目のテンポはかなり遅くなり、8分音符ごとにジャンプする。
18	跳ぶ	ト長調	4/4	この曲は、ピッチカートで演奏されるべき。短く、はっきりとした音を作る。子どもが一つの石から別の石へとジャンプするように。この曲はゲームの中で用いられ、子どもに合わせて速さを調節する。ジャンプは8分音符ごとに行う。子どもがリズムに意識を向け、リズムと動きが結びつくよう、同じ速さを保つようにする。
19	自然の目覚めと眠り	ト長調	4/4	この小さなメロディは、春と秋のゲームと結びついている。春のゲームでは花や種の目覚めと成長のゲームで、メロディはやわらかくゆっくり弾かれる。そして子どもに自然の成長を示唆する。草花が眠る時も同じこのメロディが使われる。
20	スキップ	ヘ長調	4/4	記載なし

表2 「器楽による典型リズム集第2編」の内容

	題名	調性	拍子	楽譜に記載の解説
1	スキップ	ハ長調	4/4	記載なし
2	行進ト長調	ト長調	4/4	記載なし
3	つま先行進	ト短調	4/4	つま先歩きは、優しくスタッカートで普通の歩行と同じ速さで弾く。
4	スキップ	変ホ長調	4/4	スライドスキップ（右に4歩・左に4歩）、そして3歩走ってホップ。それを繰り返す。スライドスキップの音楽はゆっくり、走る場所は早く。
5	行進ヘ長調	ヘ長調	4/4	記載なし
6	スキップ	ヘ長調	2/4	記載なし
7	行進ハ長調	ハ長調	4/4	記載なし
8	スキップ	ヘ長調	2/4	記載なし

表3 第1編・第2編の曲の分類と曲数

分類	第1編	第2編
行進	5	4
スキップ	4	4
描写的なリズム	11	0
計	20	8

く様子が表現されている。

また「雨粒」では、曲中の8分音符のスタッカートが雨粒を表しており、その8分音符に合わせて動くことが示唆されている。また曲中のあるところでは、ピアノ（小さく）からだんだん大きく、そしてだんだん小さく、またあるところでは、アクセントが多く付され、強弱や音色を変化させることによって、雨粒の強さの変化が表現されている。注意書きには、「音色の色彩、明暗、強弱が子どもに雨の勢いを示す」「これにより、音色の質を子どもたちが素早く知覚することを促す」と書かれ、子どもたちに音のニュアンスを感じとらせようとしていることがうかがえる。

また、「自然（植物）の目覚めと眠り」では、植物が目覚めていく様子を、ゆったりとした速さで、上昇型の和音を使って表現している。またその他の曲も、それぞれがその題材の感じやリズムをよく表している。

この「描写的なリズムについて」、アンダーソンは第2編の序文の中で、「描写的な動きは、ゲームの中でも使われる。その動きは、ゲームの中で子どもたちの考えの本当の表現のために、歌の代わりに

ピアノ伴奏だけで行われる。」と述べている<sup>16)</sup>。

本曲集に出てくる自然や社会生活の題材は、当時の他の幼稚園向けの歌やゲームの中にも見受けられる。その中での遊び方の解説では、歌を歌いながら歌詞内容に合った身振りをするものが多い。例えば、ハイルマン（Hailmann, E. Lucas）の歌の本にある『春の花』（The Spring Flowers）<sup>17)</sup>では、円の中にいる子どもたちが、それぞれ違う花になって、歌詞にあるしぐさをし、朝になったらお花が開く動作を歌いながら行う遊びになっているが、音楽そのものは、特に花が開くような感じを表してはいない。また歌詞内容に合う身振りをし、また歌いながら行うため、動きは限定的になっている。

一方、同じ花が開く様子を扱ったアンダーソンの「自然（植物）の目覚めと眠り」では、前述した通り、歌詞がなく、曲そのものが花の開いていく感じを表しているため、子どもたちは動きに専念し、題材をイメージしながらより自由に動くことができるようになっていく。

このように、アンダーソンの曲は、歌詞をなくし、ピアノの音だけでその題材の雰囲気やリズムを表現することにより、子どもの動きをより自由にし、ま

16) Anderson, Clara L. (1900) "Preface" *Instrumental Characteristic Rhythms Part II*, C. L. Anderson Publishing Co., p. 5

17) Hailmann, E. Lucas (1887) *Songs, games and rhymes for the nursery, kindergarten and Primary school, with notes and suggestions*, Milton Bradley Co., p. 67

た子どもがその音楽の特徴を解釈できるように導き、動きの表現を引き出そうとしていると思われる。

また、第1編の序文においては、子どもたちが実際に見たり経験したりしたことをイメージし、それを身体で表現する時、音楽（ピアノ）が同時にあると、よりよくそれらが表現され、さらに、子どもたちがより自分自身を自由に表現することを助けると述べられている。こうした子どもの自由な表現を尊重する考えは、創造性の育成を重視する進歩主義教育の理念と一致する。子どもの本当の表現を大切にす進歩主義教育の理念のもとに、アンダーソンは題材ごとに、特徴的な音楽を作曲したことが推察される。

#### Ⅳ. おわりに

本稿では、米国で19世紀末に出版された器楽曲集、アンダーソン『器楽による典型リズム集』（1896）と『器楽による典型リズム集：第2編』（1900）の内容の考察を試みた。その結果、子どもが様々な特徴のある音楽を聴いて動くことによって、音楽を解釈する力を養おうとしていたことが明らかとなった。また模倣表現においては、題材の特徴を捉えた音楽を用意することにより、子どもの表現を引き出そうとしていることがわかった。本書には、音楽の力によって、子どもの身体に内在しているリズムと表現を引き出すという発想があり、それは、進歩主義教育の理念が、音楽活動においても反映されている点と言えるだろう。今後は、20世紀初頭の幼稚園におけるリズム活動の内容を考察し、進歩主義教育における身体によるリズム活動の理念と内容について、さらに明らかにしていきたい。

#### 引用・参考文献

Anderson, Clara L. (1896) *Instrumental Characteristic Rhythms*, C. L. Anderson Publishing Co.  
 Anderson, Clara L. (1900) *Instrumental Characteristic Rhythms Part II*, C. L. Anderson Publishing Co.  
 Beebe, Katherine (1904) *Kindergarten Activities*, The Saalfield Publishing Co.,  
 Hailmann, E. Lucas (1887) *Songs, games and rhymes for the nursery, kindergarten and Primary school, with notes and suggestions*, Milton Bradley Co.  
 M.S.T. (1897) "The Place of Rhythm in Child Life" *The Kindergarten Magazine Vol. 10 No. 4*, Kindergarten Literature Company, pp. 245-251  
 三神淳子 (1997) 「デューイによるパーカーの位置づけ：

『進歩主義教育の父として』慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 No. 46 pp. 7-14  
 持田葉子 (2015) 「広島女学校附属幼稚園における音楽活動について～広島女学校附属幼稚園・保姆師範科編纂『遊戯唱歌』の考察を通して～」聖和短期大学紀要第1号 pp. 39-47  
 Montz, Katharine (1894) "INSTRUMENTAL SKETCHES FOR KINDERGARTENERS" *Kindergarten News No. 8 Vol. 4*, p. 268, Milton Bradley Co.  
 土川五郎 (1917) 「幼稚園の遊戯に就て」『婦人と子ども』17巻9号 pp. 330-336  
 土川五郎 (1918) 「リズムについて」『婦人と子ども』18巻2号 pp. 46-48  
 ニーナ・C・バンデウォーカー著 中谷彪訳 (1987) アメリカ幼稚園発達史 教育開発研究所  
 Vandewalker, Nina C. (1908) *The Kindergarten in American Education*, The Macmillan Co.